

復員する時、着ていた軍服を十年間着ていました。将校マントは毛布代りに使いました。

二万円借り、都築紡績の梱包材料や専売公社の塩吠を納入したり、物資不足の時代に公定価格で物資の斡旋をする仕事などで、十年後に自宅を建てました。物価の高騰等で晩飯がそうめん一把だったこともあり、激動の二十年を潜り抜け、ようやく安定した生活を得て、町会議員も経験し、誠実一路で現在に至っております。

南満逃避行

東京都 久保田 一 愛

私が高等小学校を卒業して、しばらく家の手伝いをしていた時、満鉄から全国的な規模で鉄道見習生の募集があり早速応募し、見事試験に合格した。正式名は満州工務員養成所である。はっきり記憶にないが、その時の合格者は数百人に達したと聞いている。当時両

親は健在で私は七人兄弟の長男だった。家業は自小作の農業である。

昭和十九（一九四四）年に徴兵検査を受け、同二十五年五月二十日、父の第九九八部隊に現地入隊した。工兵隊で、国境から南下の部隊である。四平街と梅河口の間の西安工務区で満鉄時代一緒に働いた同期の長岡が、同年兵として一緒に入隊したのは何よりも心強かった。

父に一月ぐらい滞在し、昭和二十年の六月、北満の東安の北の斐徳に満州第一三〇八〇部隊が編成され、遊撃隊として駐屯した。この第一三〇八〇部隊は全関東軍から選抜された精鋭で、若い兵が多かった。総勢、二千人を超す大部隊だった。

毎日の訓練は想像を絶するものがあつた。対戦車両薄攻撃、トーチカ攻略、塹壕戦とソ連を敵としての二十四時間の持久戦と、可能な限りの想像もつかない厳しさであつた。

八月七日、青天の霹靂、ソ連の参戦と南下が始まっ

た。

我々の部隊は東安の司令部に集結、ほとんどの部隊は牡丹江へ南下して行つた。各部隊から少数の分隊が東安死守の命令を受け、我が部隊から私の属する第五中隊第三分隊がその任を担うことになった。

私はこの時、ここで死ぬのだと覚悟を決めた。

九時頃の情報では数時間後にソ連の機動部隊が進行してくるとの噂でもちぎりだった。幸い、我々の分隊長は家族が満州にいる隊長だったため、こんな場所で死守するより後方に下がろう、同じ捕虜になるにも第一戦地区の捕虜と第二戦区の捕虜では待遇、扱いが異なる、ともかく、吉林省に逃げこもうということに話がまとまり、分隊長ほか三十人で兵器庫から新車の自転車を引き出し、持てるだけの食料と荷物を積み込み、本隊と逆方向の林の方角に向かって逃走を始めた。

とにかく、それから幾多の小戦闘にも出会ったが、我々の分隊は危険な所は迂回して戦闘を極力避け、牡丹江の鏡白湖南側のローヤ山脈に逃げこんだ。満鉄時

代の知識、経験が役立ったことは言うまでもない。

地図と磁石を頼りにこの山脈を越すと吉林省に入るのだが、昼なほ暗いうつそうたる大森林であった。この山林には数しれない日本兵が入っていた。敗残兵同様の姿で山中をさまよっていた。その多くの者はだんだん食料が尽き、山中を出て牡丹江に下り、最後にはソ連行きとなった模様だ。

幸い我々は入山する時、大きな朝鮮牛を一頭徴発し、この牛を殺し一日がかりで肉を茹で、スープを捨てて牛肉を乾燥肉として皆で分けて持っていた。もうこの時の隊員は十二人に減っていた。この乾燥肉のお蔭でようやく山頂に辿りついた日のことは、今でも脳裏に焼きついて覚えてる。

吉林側は森林伐採も進み、森林鉄道も敷設されていた。天にも昇る気持ちでトロッコに乗り一気に平野へと下っていった。

九月十日を過ぎたある日、京図線の敦化の手前で開拓団の難民の大集団に出会い、うすうす聞いていた敗戦の事実を初めて確認した。

我々は太急ぎで朝鮮人の開拓部隊に戻り、悪いとは知りつつ銃を突き付け、軍服を民間人の服装に取り替え、銃・弾丸を川に投げ捨てて先程の難民の中に入り、赤ちゃんをおんぶしたりして、一般人となるなどいろいろと苦難の末、敦化駅（新京―図們）前に集結し、そこから難民列車で新京（長春）に向かった（九月中旬）。

ようやく新京駅につき、難民はいったん新京神社境内で野宿する。私はここで急いで難民及び隊員とも別れ、満鉄本社に行き、いろいろと事情を説明し、パスポートを発行してもらい、その足で吉林工務店へ行く（九月二十五日頃）。工務店でいろいろと梅河口工務区の事情を聞き、朝一番の列車で待ちに待った懐かしき我が梅河口に向かった。

吉林―梅河口の所要時間は、通常なら六時間程であるが、敗戦後のごたごたで、夕方ようやく五月まで勤務していた懐かしの梅河口駅二番ホームに着いた。同乗列車の車内はたくさんさんの難民で混雑を極めていた。

下車してみても不思議に一人の日本人の姿を見かけない。事は急かねばと急いで工務区に向かう。つい先日まで一緒に働いていた満人達が四人いて私を見てびっくりし、そのうち、喜んでくれた。そして、手分けして水道関係の部に人に連絡してくれ、十人以上の満人が集まってくれた。

梅河口も急に状況が悪化し、日本人は全員無事に避難していた。話を聞き私は腰くだけになりそこにしゃがんでしまった。

いろいろと話した結果、当地にもソ連兵及び八路軍が侵入していて日本人の面倒をみるのが、だんだん難しくなり心苦しいようだった。彼等が相談の結果、セメント倉庫に一泊できるよう工面してくれ、食事や寝具の面倒もみてくれ、私も心底から喜び嬉しかった。

次の朝早く、以前住んでいた青年隊舎及び社宅を一見に出かけたが、これが二、三日前まで居住していた日本人住宅街かと驚いた。残っているものは何もなく全くの廃虚であった。この時「国破れて山河なし」

ということを心から感じ、涙がとめどもなく流れた。

九月二十八日九時、奉天（瀋陽）行の列車に満人達の謀いで密かに機関車内に乗車し、涙を流し固い握手をかわし、別れを惜しんだ。

撫順城駅に着いたのが午後三時過ぎで、またこの時も幸運に同乗列車から一団の難民が下車した。私も急いでこの団体に入り撫順市に向かった。

この撫順市に入る手前に大きな川がある。その橋のたもとには、ソ連兵と八路軍の歩哨が立っていて日本人の城内進入を見張っている。この時も、さも開拓団難民のように子供をおんぶしたり、手をつないだりして、見事に撫順に進入することができた。そうしてようやく夕方、梅河口工務区の連中に避難先の氷安台小学校で会うことができた。

思えば、八月八日、東安を脱出してから五十数日目である。長い長い遁走譜であった。

ここで前職場の鈴木水道助役の家庭の一員として同居し、また撫順での避難先にも苦難はあったが、何と

か昭和二十一年六月中旬、コロ島から引き揚げ、舞鶴にお盆の七月十三日上陸、生まれ故郷の山梨には七月十六日帰郷できた。

北支から満州、

そしてシベリア

愛知県 久保田 禮 三

長野県下伊那郡阿南町で父富治、母みきよの間の四男二女の三男として生まれた私は、徴兵検査で甲種合格となり、入隊まで家業である農業と養蚕を手伝っていました。

長兄は軍曹としてシンガポール攻略戦を皮切りに中支、南支、スマトラと転戦中であり、次兄は十七歳で満蒙開拓の先駆者として東宮大佐の指揮下に入り、開拓義勇軍の前身である試験移民隊の一員として渡満しました。しかし活躍中に無理がたたたり、病を得て帰国、自宅で病死し、村葬までしてもらいましたが、遺